

2022年5月15日 半田朝礼拝

午前 10 時 30 分

司会 榊原善夫

奏楽 大谷京子

前 奏

招 詞

ヨエル書 第 2 章 12 節－14 節

讃美歌

讃美歌 21－149－1（わがたまたたえよ）

交 読

詩編 第 100 篇（p. 109）

祈 禱

聖 書

マルコによる福音書 第 16 章 9～18 節

（新約 p. 97）

讃美歌

讃美歌 21－59－1（この地を造られた）

説 教

「新しい言葉が語られる」

今朝わたしたちに与えられているマルコによる福音書はもともと 16 章 8 節で終わっており、9 節から 20 節までは後に書き加えられた部分だということに気がつきます。また、16 章

8節の終わり方があまりにも唐突なために、あとで追加されたものにも2種類あって、「結び 一」と「結び 二」と言われるものがあるということもはっきりしています。もし16章8節が元々の結びだとすれば、この福音書を書いた記者の意図は何だったのだろうかという問いも含めて、教会が長く16章20節までをマルコによる福音書として読んできた伝統に従って、神の言葉として聞きたいと願っています。

さて、ここをお読みになっていろいろな感想を持たれるだろうと思いますが、一つ心を捕らえられるのは、11節と13節に繰り返される「信じなかった」という言葉です。しかも誰が信じなかったのでしょうか。イエスさまを殺した人たちが、まさか、自分たちが殺したイエスが甦ったなどとは信じられないと言っているわけではありません。10節に「イエスと一緒にいた人々」とあります。イエスさまの仲間です。その仲間だった人たちが、イエスさまが甦られたということを信じなかったとあります。弟子たちが、イエスさまの復活を信じない。しか

も、自分たちの仲間であるマリアが、ふたりの仲間が、イエスさまに会ったのだと言っても信じない。どうして信じなかったのか。14節には「イエスが現れ、その不信仰とかたくなな心をおとがめになった」とあります。頑なです。堅いのです。鈍感です。無神経です。受け入れないのです。聞いても聞かないのです。どうしてそんなことになったのでしょうか。もうひとつ、併せて読まなければならないのは、10節に、「イエスと一緒にいた人々が泣き悲しんでいた」とあることです。普通、泣き悲しむということは、心の柔らかな人がすることであるかのように思います。そして、実際にそうだろうと思います。けれど、悲しみはしばしば人の心を頑なにします。わたしたちも、そういう経験をするだろうと思います。自分自身が、悲しみの中に深く閉ざされた時に、心がすっかり閉ざされてしまっていたことを思い起すことがあるだろうと思います。せっかくの思いやりと慰めの言葉を拒否した自分であったことを後になって申し訳ないと思いながら思い起すことがあるだろうと思います。絶望に捕らわれていたときに、人の励ましの言葉を聞くこ

とができなくなっていた、心が狭くなっていたことに気づくようになるのではないかと思います。

だとすると、ここで弟子たちは、まだ絶望に捕らわれていました。まだ望みを持つことができませんでした。悲しみの中で、心が頑なになっているということは、神の慰めに対して、祝福に対して心を閉ざしているということです。どんな神さまからの言葉よりも、死の力のほうが強いではないか、とどこかで思ってしまうということです。他人事ではありません。キリスト者であっても、わたしたちの思いが、そうした諦めの虜になってしまうことがあるのではないか。自分を取り囲んでいる現実に関心を奪われて、イエスさまは甦られたと言う人の言葉に、耳を傾けなくなってしまうのではないだろうか。

福音書に続く後日物語、結びは、その頑なな心を揺さぶる神さまの祝福の物語です。わたしたちは、そこで神さまに心を揺さぶられます。イエスさまが甦られたのは、そのわたした

ちの頑なな心の中に立ってくださるためでした。きっと、この物語に出てくるマグダラのマリアにしても、ふたりの弟子にしても、本当にもどかしかったと思います。わたしたちはイエスさまにお会いしたのよ、とマリアが一所懸命に叫んでも、同じ仲間が耳を傾けてくれない。信じてくれない。くやしかったと思います。自分の言葉の無力を嘆いただろうと思います。どうして神さまはわたしの言葉に力を与えてくださらなかったのだろうかと思ったかもしれません。そして、もしマリアが、ふたりの弟子が祈ったとすれば、その祈りがきかれたと言ってもらいたいと思います。イエスさまご自身が現れてくださいました。そして、イエスさまご自身が、その不信仰と心の頑なさを叱責なさった。実はこれも忘れてはいけないことです。わたしたちの不信仰は、イエスさまに叱られるべきものです。そこでは、甘えるわけにはいきません。あなたの不信仰はよく分かるなどとイエスさまはおっしゃいません。間違っているとされます。

けれど、間違っていることだから、間違っていることをしている、だからあなたがたは、ここから出て行きなさいとは言われませんでした。その不信仰な頑なさの中にあつた弟子たちに、ご自身を示して、そして直ちに言われました。「全世界に行つて、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。信じて洗礼（バプテスマ）を受ける者は救われるが、信じない者は滅びの宣告を受ける」。この「滅びの宣告を受ける」という言葉だけを聞くと、どきっとするだろうと思います。信じない者は滅びる。そんな残酷な言い方はない。そんな決めつけたような言い方はしない方がいい。もちろん、でも、このような言葉を語ることを命じられた弟子たちはどうだったのでしょうか。自分たちは、わたしたちは信仰を持っている、わたしたちは信じている、だから天国に行くことができる、あなたがたは滅びる、今のうちに信じなければ滅びるのだと、それこそ力溢れて、人々を脅迫するように信仰を強いたわけではありません。どうしてそう言えるのか。それは、信じない者は滅びの宣告を受けるといふ、その信じない者こそ、その代表者こそ、

自分たちであったことを忘れることはできなかったからです。

使徒パウロが、わたしは「罪人の中で最たる者」（Iテモテ1：15）、罪人の頭です、と書き記した言葉を、思い起さないわけにはいきません。それは、神のさばきが始まったときに、真先に裁かれるべき者は、このわたしだったのだということです。その自分が、むしろ、だからこそ神さまの憐れみによって、不信仰の代りに、頑なな心の代りに、今、神さまの恵みをたっぷり受ける心を与えられたのです。そういう弟子たちが語ります。

あなたがたは、滅びから守られているのだと。あなたがたも信じることができるのだと。

この福音を宣べ伝えるのは、すべての「造られたもの」に向けられるものだとイエスさまは言われました。すべての「人間」とはなっていません。この「造られたもの」というのは、どういう意味でしょうか。ある人は、人間以外の世界に対しても救いが呼びかけられていると理解します。これも、ひとつの心惹かれる考え方です。あるいはまた、人間と言う代わり

に「造られたもの」と語られているのは、神さまが、わたしたちを造ってくださった、世界を含めて、造ってくださったときに祝福してくださった、あの祝福を回復するための、福音であることを意味しているとも考えられます。神さまに造っていただいた世界、人間が祝福から落ちた時に、必死になって、それを祝福の中に引き戻そうとなさった神さまの救いの歴史が、ここに新しく始まります。

そして、新しく始まったときに、新しく造られたものの世界に、そのしるしが伴う。17節以下にはそのことが記されています。悪霊が追い出される。蛇を掴んでも毒を飲んでも害を受けない。不思議なことです。わたしたちも、そうなのだろうか。毒蛇を掴んでみたらいいのでしょうか。毒を飲んでみたらいいのでしょうか。そんなことを、ここで意味しているのではないことは明らかです。初代の教会は、さまざまな奇跡を経験しました。わたしたちの時代にも、奇跡が無くなるわけではありません。けれど、教会は奇跡を売り物にするものではありません。

せん。大事なことは、主の名によって、新しい神の勝利の世界が始まっているところに立ち続けることです。その中で、誰もが、おそらく語るることができると思うひとつのことは、「**新しい言葉で語る**」ということです。新しい言葉を語るというのは、元の言葉の意味をもっとはっきり伝えると、「新しい舌で語る」という言葉です。新約聖書のヤコブの手紙には、人間が一番コントロールできないのは、自分の舌だと言います。これは、誰もが思い当たることです。日常の会話にしても、何にしても、自分がこれから語ろうとすることをよく考えて、その言葉のひとつひとつを吟味してから口にするなどということは、とても少ないだろうと思います。子どもに対して言ってはいけないようなことを、パッと行ってしまったから後悔する。言わなくてもいいことを、相手に言ってしまった。翌日になっても翌々日になっても、悔やんで、悔やみきれないようなことを自分の舌が言ってしまう。不思議なことに、人間というのは自分の舌について、最も不自由を感じる。それがヤコブの手紙が教えることです。けれど、ヤコブの手紙もまた、その失敗のままにわた

私たちは罪を犯し続けるとは言っていない。わたしたちは、新しい舌を与えられたのだから、その新しい舌に生きようではないかと呼びかけます。ここでもそうです。わたしたちはいつの間にか、自分の舌が、鮮やかな賛美の歌を歌うようになっています。祝福を告げるようになっています。慰めを語るができるようになっています。その事に気づくようになります。

何年も前ですが、他教会の方が礼拝に来られ、その方が礼拝後にこういう感想を言われたことがあります。それは、半田教会の礼拝は、会衆の賛美がとても力強く喜びに溢れたものでしたと言われたことです。わたしもそう思います。今は新型コロナウイルス感染の下、なかなか難しいことですが、それでも半田教会の良いところの一つはそれだと思っています。ここにいるわたしたちは、合唱団ではありません。声楽を専門に学ばれた方もいますが、ほとんどはそうではありません。けれど、礼拝において声を合わせて、賛美します。キリストを知らなければこんなふうに主を賛美する、主を喜ぶ賛美を歌うこと

はなかったと思います。その意味では、わたしたちはそのように変えられたのだと改めて思います。新しい舌を持つということはそういうことです。

マルコによる福音書が未完決で終わっていることに、教会の人びとは、ある意味で恵みを感じたのではないかと思います。それは、恐れて、終わっていない。恐れの中で、じっと心を頑なにしてしまうことでわたしたちは終わっていない。そこから柔らかく、広く、新しい舌をもって賛美を語り、福音の恵みを語り、神さまをほめたたえるところへと移されます。だから、祝福に応える物語を福音書の結びとして、付け加えることができる。これは、わたしたちに与えられている祝福です。新しい言葉の力、喜びです。お祈りいたします。

教会のかしらである主イエス・キリストの父なる神さま、どうかわたしたちにも、主の甦りの勝利を歌う信仰と言葉とを与え続けてくださいますように。今悩みの中にある者を、

心閉ざされそうになる者の心を開いてください。あなたはすべてのところにおいて、わたしたちと、共に歩んで下さるいのちの主です。み子もまた、そのあなたの主であることを、はっきりと証しして下さる甦りの主でいてくださいます。この主を信じる信仰において、教会の歩みに変わることがありませんように。主イエス・キリストのみ名によってお祈りいたします。

アーメン

讃美歌 讃美歌 21-59-2 (人として生きられた)

献 金 讃美歌 21-65-2

報 告 週報の3頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讃美歌 21-93-5A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。
主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。

主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と
聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>